

平成二十一年度（二次入試）

# 国語

（検査時間 十時三十五分～十二時二十分）

## 注意事項

### 一、開始の合図で

- ◆ 解答用紙、問題用紙、下書き用紙の所定の欄に受験番号を書き入れなさい。
- ◆ 解答はすべて解答用紙の所定の欄に書き入れなさい。
- ◆ 問題文は五ページあり、その順序は **国1**、**国2**、**国3**、**国4**、**国5** で示しています。  
ページ漏れや印刷不鮮明などに気づいた場合には、手をあげなさい。

### 二、終了の合図で

- ◆ 机の上に、下から順に問題用紙、下書き用紙、解答用紙を置きなさい。  
解答用紙だけは裏返して置きなさい。

受験番号

【三】 次の文章を読んで、下の問一～問五に答えなさい。

ある芸者、藤十郎（ある役者が）に問うて曰く、「われも人も、初日には、せりふ

なまおぼえなるゆゑか、うろたゆるなり。こなたは、十日二十日も、十分に覚えていないためか」（とまどうのです） （あなたは）

しなれたる狂言＊なざるやうなり。②いかなる御心入りありてや、（演じ慣れた） （なさるやうです）

承りたし。」（教えていただきたい）

答へて曰く、「われも、初日は同じく、うろたゆるなり。「

よそ目にしなれたる狂言をするやうに見ゆるは、稽古（他人の目には）の時、せりふ

をよくおぼえ、初日には、根から忘れて、舞台にて、相手のせりふ（すべて）

を聞き、その時思ひ出だしてせりふを言ふなり。そのゆゑは、常々（日ごろ）

人と寄り合ひ、あるいは喧嘩（人と寄り集まり）口論するに、かねて、せりふにたくみ（前もって）

なし。相手の言ふことばを聞き、こちら、はじめて返答心に浮かむ。（返答が）

狂言は常を手本と思ふゆゑ、稽古にはよくおぼえ、初日には忘れて（日常を）

出る。」となり。

（注） ＊藤十郎——江戸時代の歌舞伎役者。初代の坂田藤十郎。  
＊狂言——歌舞伎の芝居。  
（金子吉左衛門「耳塵集」から）

問一 線①を現代かなづかいに書きなさい。

問二 線②の現代語訳として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア どのようなお心がけがあるのでですか
- イ なにかご心配でもおありなのですか
- ウ どういうお気に入りがあるのでですか
- エ どのように気持ちを込めるのですか

問三 「」に当てはまる言葉の現代語訳として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

- ア ただし
- イ なぜなら
- ウ けれども
- エ そのうえ

問四 上の文章について、あるグループが次のような話し合いをした。これを読んで、後の(1)～(3)に答えなさい。

Aさん 藤十郎が、せりふを「初日には、根から忘れて」舞台に出るのは、台本にとらわれず、自□自□に、思いのまま演じたいからだよね。

Bさん 「稽古の時、せりふをよくおぼえ」とあるのだから、台本を無視しているわけではないわ。

Cさん せりふは普段の会話のように言うものだと、藤十郎は考えているんじゃないかな。

Bさん それはどういふことなの。

Cさん 藤十郎は、日常会話を「相手の言ふことばを聞き、こちら、はじめて返答心に浮かむ」ととらえているから、舞台でも

Bさん 人と話している時、相手の表情や言葉の響きによって、こちら

Aさん つまり、藤十郎の芝居の演じ方は「Ⅱ」とするといふ考えに基づいているんだね。

(1) に漢字を一字ずつ入れて、最も適当な四字熟語を完成させなさい。

(2) Ⅰに当てはまる最も適当な言葉を、上の文章から二十五字で抜き出し、初めの五字を書きなさい。(句読点も一字とする。)

(3) Ⅱに当てはまる最も適当な言葉を、上の文章から四字で書き出さなさい。(句読点も一字とする。)

問五 次のア～エの短歌の中で、日常の会話における感動から詠まれたものほど

- ア おさきにといふように一樹色づけり池のほとりのしずけき桜（沖 ななも）
- イ 「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日（僕 万 智）
- ウ 「少年」の声に呼ばれてめくりゆき古きノートのなかの夕焼け（三 枝 浩 樹）
- エ 「疲れたらすわつていいです」子の描きし椅子の絵に今夜月光すわる（米 川 千 嘉 子）